本日のプログラム

＜内藤会員卓話＞

皆さんはラオスに行ったことがありますか？今日はラオス漫遊記をお話したいと思います。かつては、インドシナの戦火に巻き込まれ、今もまたアジアの経済危機の影響をストレートに受け、海外からの経済援助に頼っています。しかし、その中で暮らす人々の心は常に豊かで微笑を絶やさない優しさを持っています。

原生林の中を大きく蛇行しながらメコン川は森の国ラオスを1900kmに渡って流れています。全長4350km、チベット高原に源を発し、次第に水かさを増したメコン川はタイ・ラオス南部では川幅が14kmにも達します。さらにカンボジアを抜けて、ベトナムから南シナ海に注がれていきます。インドシナ半島にひっそりと存在するラオスは、中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムの5カ国と国境を接し、日本の本州ほどの広さを持つ内陸国です。熱帯性モンスーン気候に属し、雨季・乾季の2つのシーズンに分かれます。国土は約24万平方kmで、その約70%が高原や山岳地帯です。ラオスで1番高い山はプービア山(2820m)です。ラオスの人口は約560万人(日本の人口の5%)で、約10%がビエンチャン特別市に集中しています。民族もモン族、ヤオ族、アカ族など多数あり、その数68とも言われ独自の文化を育んできました。そして民族は大きく分けてラオ族、丘陵地ラオ族、高地ラオ族の3つに分かれます。女性は膝丈位のスカートやズボンをはき、民族によっては帽子をかぶっています。主産業は農業と木工工芸品、電力、ラオマウンテンコーヒーです。

ラオスが歴史に登場するのは14世紀中頃。ランサン王国がルアンパバンに王都を定めた頃からです。16世紀に絶頂期を迎え、18世紀に入ると王位争奪の争いから、ランサン王国はビエンチャン、ルアンパバン、チャンパサックに分裂し、その後1893年フランス領下となり、ランサン3国はラオ族を複数形にしてラオスと呼ばれるようになりました。1975年ラオス人民革命等の勝利により王政を廃止し、現在のラオス人民共和国を樹立しました。

ラオスの首都、ビエンチャンはメコン川沿いに作られたラオス最大の都市で、政治・経済の中心、空路・陸路での出入国のメインゲートとなっており、他の県とは違う行政特別市になっています。1999年6月には日本政府のJICAによって、ワッタイ空港新ターミナルが作られました。街並みはフランス植民地時代の古い建物と並木道、そして数多くの仏教寺院が混在し、アジアと西欧文化の融合が見られます。

センタ君のフルネームは、パーソンシュク・センタ・ノンバット君です。ご両親はビエンチャンの南方70kmにあるサバンナケートと言う所に住んでおられます。お父さん、お母さん、子供は11人いますが4人は外国で暮らしているそうです。一家はサバンナケートとビエンチャンで別れて暮らしていますが、教育熱心なご両親の希望で首都で良い学校のあるビエンチャンにも家を持ったそうです。センタ君のカウンセラーをして4,5年が経ちますが、センタ君は大変真面目でとても誠意のある努力家です。昨年4月には間組に就職しましたが、間組でも外人を採用したのは初めてだそうです。兄弟、従兄みんな仲良く、初めて我が家に招待した時も、食事が終わったら女性全員が一斉に台所に行き、食器を皆で洗い片付けてくれた事を思い出します。どのような状況であっても、このように皆でお礼の形を伝えてくれた事が、一番の国際親善になると思いました。

タイ航空で6,7時間かかってバンコクに着き、ビエンチャン行きの便を4時間待ちました。空港で迎えられ、翌日より市内のお寺やその他観光名所を案内していただきました。街中で驚いた事は、汽車・電車等の鉄道が1つもない事でした。よく見かけるのはバイクを改造したトクトクと言う乗り物でした。メインストリートは綺麗に舗装されていますが、それは日本のJICAの援助によるもので、日本の国旗が立っております。食事は麺類が主でうどん、ひやむぎ、ビーフンなどでスープは淡白です。テーブルに何種類もの調味料が置いてあり、自分の好みで食べます。お肉と野菜の鍋をよく食べ、ラオスビールもおいしかったです。またコンデンスミルクの上にコーヒーを注ぐラオコーヒーが大変気に入り、帰国してからもその飲み方をしています。ホテルは、妹さんが3つ星ホテルを予約してくれました。街中では日本人をほとんど見かけませんでした。レートですが、ラオスの通貨はキープ(KIP)で10000キープが約115円になります。

今回の旅行で反省、学ぶべき点がたくさんありました。ラオスは決して豊かな国ではありませんが、センタ君とその家族、お友達ははるばる日本から来たお客さんに満足してくれるよう、また喜んでいただけるよう一生懸命でした。帰国前日、私たちからお礼のリターンバケットを申し出たら、ラオスで一番の和食のお店を選んでくれ、女性たちは美容院に行き正装でのぞんでくれました。エチケットを心得た人たちだと思いました。帰りには全員で見送りに来てくれました。再びラオスに行くことはないと思いながらも、心引かれる思いでラオス空港を後にしました。